

万緑の大宰府政庁跡

序論 大宰府学研究の目的と経過

第1章	研究の目的	赤司	善彦・小嶋	篤	3
第2章	研究の経過	赤司	善彦・小嶋	篤	4
第3章	本書の構成	小嶋	笙		ç

序論では、大宰府学研究の目的と経過を記す。大宰府学研究は、九州国立博物館のコンセプトである「地域と連携し、相互に協力しながら行う」活動の一つである。第1章では、大宰府学研究の定義を記し、研究の指針を明らかにする。第2章では、九州国立博物館が実施してきた事業のうち、とくに大宰府学研究に関わる事業の実施状況を整理する。第3章では、本書に掲載する論考(講演会・シンポジウムの当日配布資料含む)の初出資料を明示する。



大宰府政庁跡と四王寺山(大野城跡)

第1章

研究の目的

赤司 善彦 小嶋 篤

1. 九州国立博物館と大宰府学研究

九州国立博物館は、アジアとの文化交流の歴史をテーマとして、九州・太宰府に設置され、平成17年 (2005) 10月16日に開館した。開館に至るまでには官民挙げた誘致活動の歴史があるが、設置場所の選定に関しては、様々な各県の思惑があるなかで最終的にこの太宰府に決定している。それは地理的な福岡県の太宰府市ではなく、古代より対外交渉の拠点であった大宰府という歴史的役割が決定打となり各県が合意した経緯がある。つまり、九州国立博物館は、大宰府という文化遺産を母にして産み出されたといってよい。国も大宰府史跡の長きに渡る保存運動の一つの到達点として、九州国立博物館を位置付けたのである。こうして、大宰府史跡という野外ミュージアムと対をなし、新しい活用を探るミュージアム九州国立博物館が開館した。

以上をふまえ、九州国立博物館は開館以来、市民との共生・協働を念頭に置いた事業を展開してきた。 その事業の一つが「大宰府学研究」である。大宰府学研究の目的とは、市民とともに大宰府を基点に形成された歴史的環境を研究し、その成果の公開・活用を考えることにある。

では、大宰府学研究が研究対象とする「大宰府を基点に形成された歴史的環境」とはなんだろうか。本環境を象徴するのが、現在の大宰府政庁跡の景色である。大宰府政庁跡の中央から北を望むと、まず正面に基壇と礎石が目に映る。これらは天慶4年(941)の藤原純友による焼き討ち後に再建された正殿跡であり、地下にはさらに古い正殿跡や古代以前の遺跡が眠る。この正殿跡の中央で、存在感を一際放つのが太宰府三碑とも呼ばれる石碑群である。これらは福岡藩の儒学者、貝原益軒や亀井南冥にも縁のある石碑群で、大宰府顕彰のために明治・大正年間に建立されたものである。次に正殿跡の背後に目を向けてみよう。緑色の山林が四王寺山山頂まで途切れることなく広がっていく。この四王寺山に、大宰府守衛の要である古代山城・大野城は築城された。山頂から続く尾根線には、城壁である土塁が延々と伸びる。また、山の中腹、平野に突き出るように伸びる尾根線には、中世山城の岩屋城跡も存在する。このように、大宰府政庁跡の景観には、太宰府が歩んできた歴史の累積そのものが眼前にある。

加えて重要なのは、この景観が漫然と存在してきたのではなく、先人が考え抜き、今日まで守り続けてきた「文化的景観」であるという事実である。大宰府政庁が置かれた四王寺山山麓は、1963年に大規模な宅地造成計画が立案され、国・県・町・住民を巻き込んだ開発と遺跡保存のせめぎ合いの舞台となった。この議論は国会でも取り上げられるなど、遺跡保存問題の象徴的事案として展開した。大宰府史跡の調査研究は、住民への理解・協力を求めていく根幹事業として始まったのである。つまり、現在の景観は、人々が学術的研究成果も素材に、大宰府を基点に形成された歴史的環境について考え、問い続けてきた結果の姿と言えよう。九州国立博物館が実施する大宰府学研究も、太宰府の歴史的環境を学び問う過程を通じて、当地の「新たな文化的景観の形成」に寄与することが期待される。

2. 大宰府学研究の視野

大宰府学研究が研究対象とする歴史的環境の範囲を確認する。まず時間的範囲を見てみよう。遺跡としての大宰府史跡は、当然、大宰府官衙・古代山城を中心とするが、弥生・古墳時代の集落、さらに古くは旧石器・縄文時代の狩猟痕跡も内包する。遺跡は、これらの各時代の営みが古代都市・大宰府の存

立基盤であることを物語っている。つまり、大宰府学研究の時間的範囲は、人類史と同義であり、自然 地理学においては先史以前も範疇に含むと定義できる。

次に空間的範囲を把握する。西海道には都からの派遣官人のみならず、東海道・東山道の人々も防人や俘囚として、多数滞在していたことが判明している。彼らを認識するためには、日本律令制内のみならず、その外域の把握が必要であることは多言を要さない。南に目を向けると、奄美群島で生産されたカムィ焼は大宰府でも流通しており、古代の流通を把握するための体系的研究が求められる。より遠隔地からの輸送品としては、シルクロード経由でもたらされたイスラム陶器やガラス類、東南アジア原産の香木類等があり、これらは日本の玄関口とも言える大宰府に集積された。つまり、物質資料のみに着目しても、大宰府学研究の空間的範囲はユーラシア大陸および周辺諸島群の全域におよぶ。あわせて、文化人類学的視点からの比較研究を加えると、大宰府学研究が対象とする空間的範囲はさらに広がる。

最後に研究対象範囲を確認する。大宰府学研究の第一の研究対象は歴史資料であり、上記で述べた遺跡や文字史料はその筆頭である。これら歴史資料にあわせて、今日の歴史的環境を別側面から把握すると、さらなる対象資料の拡大がもとめられる。なぜならば、大宰府の存在は、当地の芸術・文化・信仰・民俗面でも根幹的要素となってきたためである。大宰府官衙の整備と併行して進められた観世音寺は、「天下の三戒壇」の一つとして、西海道における仏教界の中心的役割を果たしてきた。同寺伝来の梵鐘は日本最古級の作例であり、今日でも現役で音色を響かせている。また、宝蔵に安置されている仏像も、仏教美術の優品というのみならず、大宰府羅城門に安置されていた可能性もある資料を含む。都から派遣されてきた大宰府官人も当地に大きな足跡を残してきた。文化面では万葉筑紫歌壇が象徴的で、大伴旅人、山上憶良らが当地で詠んだ歌は万葉集に収められ、今日でも親しまれている。そして、当代一の文化人でもあった菅原道真は大宰府で没し、太宰府天満宮の御祭神として、全国各地の人々の崇拝を集めてきた。天満宮で執り行われる「神幸式大祭」や「鬼すべ神事」等は、太宰府を彩る風物詩にもなっている。また、大宰府の鬼門(北東)に位置する宝満山は、古代からの霊峰で、最澄・空海も同山で祈祷を行ったと伝わる。後に宝満山は修験道と結びつき、英彦山とともに九州山岳信仰の双璧をなした。

これらの文化面に加えて、大宰府は自然環境とも強い繋がりをもつ。大宰府は玄界灘と有明海を繋ぐ 地理的回廊に位置する。その防衛を担う、大野城・基肄城・阿志岐山城の土塁は尾根線に沿い、水城は 二日市地峡帯の谷地形を利用して築かれた。また、大宰府の運営には、水源や燃料の確保といった都市 基盤の整備がもとめられる。つまり、気候・地質・植生等の自然地理分野も、大宰府学研究の射程に入 ろう。二日市地峡帯という自然環境は、現代生活も規定する要素であり、谷底に雨水が急激に下るとい う特質から、今日でも水害に悩まされ続けている。その一方で、用水・飲料水の確保にも苦慮してきた 歴史があり、山麓のいたるところで貯水池が営まれている。

以上のように、大宰府学研究の研究対象は、歴史資料を基軸としつつも、その関連分野にも及ぶ。むしろ、研究の進展に伴い、研究対象は随時拡大する。個別研究をさらに掘り下げるとともに、細分化が進む研究成果を再統合することが、大宰府学研究の真髄である。その成果は、太宰府の歴史的環境に対する答えであり、さらなる問いでもある。大宰府学研究は一連の学問的営みにより、太宰府の「新たな文化的景観の形成」の一助となることを目指している。

第2章

研究の経過

赤司 善彦 小嶋 篤

1. 九州国立博物館の開館準備

九州国立博物館は開館準備段階より、展示公開を念頭に大宰府の調査・研究を進めてきた。特に「文化交流展」を視野に入れ、大宰府の対外交流機能に重点を置いた。

大宰府は国境警備に伴う軍事機能を強化し、また、外交使節の応対など対外交渉の拠点を維持する財政基盤を整えるために、西海道を統括した側面もある。とりわけ、海外の使節は直ちに都へ迎え入れるのではなく、一旦、大宰府に留めて事情聴取を行い、その結果によっては大宰府で応接した後に帰国させるなど、二段階の外交システムを採用していた。その直接の窓口となったのが、博多湾に設けられた鴻臚館である。港湾機能を兼ね備え、使節の応接といった外交の場であると同時に、国境管理を兼ね備えていた。つまり、海外の使節を受け入れるだけでなく、遣唐使や遣新羅使などの我が国から出国する使節船団の発着地も兼ねた。そのため大宰府は遣唐使が運んだ文物の点検も担っていた。

当館4階文化交流展8室では、大宰府が点検した遣唐使船交易品を取り上げている。この展示では、ユニバーサルデザインを見据え、視覚・触覚・嗅覚・聴覚で体感できる展示構成となっており、大宰府を行き交った文物を魅力的に紹介している。遣唐使の性格を「中国へ輸出した文物」と「中国より輸入した文物」を対比させることで、その実態を展示で表現したのである。船上から見える状景は博多湾という想定で、古代の対外交流を体感してもらおうというのがコンセプトであった。

2. 開館後の大宰府学研究

開館後の大宰府学研究では、大宰府史跡の調査に携わってきた九州歴史資料館との研究の役割分担を前提に、韓国との共同研究がやりやすいテーマを重視した。まず取り組んだ事業は古代山城の調査研究である。開館翌年の平成18年(2006)には、国際シンポジウム「日韓の古代山城を掘る」を開催した。本シンポジウムは、福岡県教育委員会・九州国立博物館誘致推進本部が1986年より行ってきた、大韓民国国立文化財研究所との相互交流20周年を記念して実施したものである。その趣旨において、「研究成果を展示等の博物館諸活動に活かす」という大宰府学研究の主要目的の一つを明示した。

以後、本目的にも沿う形で、九州国立博物館は古代山城の航空測量を継続的に実施してきた。その詳細は、第3部1章「古代山城とGIS」にて紹介するが、山林に覆われた古代山城跡の微地形を広範囲でデータ化することに成功し、研究水準の底上げを図った。また、本データは調査研究に加え、教育普及でも活用を進めている。特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶余―」では、微地形を反映した白色模型を作成し、プロジェクションマッピングによる展示を企画した。航空測量は、古代山城跡のような広大な遺跡を把握する上で有効な手段であり、今後も調査研究とともに博物館諸活動でのデータの公開活用を模索していく。

九州国立博物館では、上記の航空測量事業と併行して、(1)研究員の調査研究、(2)講演会・シンポジウム・イベント、(3)展示公開も継続的に実施してきた。以下では、項目ごとに大宰府学研究の成果が、とくに反映された事業に絞って列挙する。

(1)研究員の調査研究

• 「GISを活用した古代山城の研究基盤の創設」

事業內容:平成22~24年度科学研究助成事業 基盤研究(B)課題番号2132155

研究代表者:赤司善彦

・「大宰府の軍備に関する考古学的研究|

事業内容:平成25~27年度科学研究費助成事業 若手研究(B)課題番号25770290

研究代表者:小嶋 篤

(2) 講演会・シンポジウム・イベント

・「展望・大宰府研究 蔵司跡の調査から」 1)

開催日程:平成22年(2010)10月30日

参加人数:260名

・「百済文化と古代日本―百済研究の新展開―」

開催日程:平成24年(2012)3月10日

参加人数:263名

・「新羅王子がみた大宰府|2)

開催日程:平成27年(2015)11月3日

参加人数:128名

・「大城(大野城)の謎に迫る!」3)

開催日程:平成28年(2016)2月27日

参加人数:308名

・「神宿る島と祈りの記憶」

開催日程:平成29年(2017)1月21日

参加人数:229名

・「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」4)

開催日程:平成29年(2017)2月18・19日

参加人数:383名

• 「知られざる沖ノ島祭祀」 5)

開催日程:平成30年(2018) 1月20日

参加人数:227名

・「大宰府史跡ものがたり」⁶⁾

開催日程:平成30年(2018)11月11日

参加人数:103名

・「響銅でつながる大宰府と東アジア」7)

開催日程:平成30年(2018)11月23日

参加人数:90名

・「展望・大宰府研究 大宰府の官衙」8)

開催日程:平成30年(2018)12月15日

参加人数:277名



①特別展

・「国宝 天神さま」



「展望・大宰府研究 蔵司跡の調査から」の現地解説



「知られざる沖ノ島祭祀」の開会式

期間:平成20年(2008)9月23日~11月30日

入場者数:174,698人

・「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶余―」

期間:平成27年(2015)1月1日~3月1日

入場者数:59,629人

・「宗像・沖ノ島と大和朝廷」

期間:平成29年(2017)1月1日~3月5日

入場者数:75,966人

②特集展示・トピック展示

・「大野城と四王寺」

期間:平成20年(2008)10月15日~平成21年(2009年)1月18日

入場者数:154,952人

・「祈りの山 宝満山」

期間:平成21年(2009)11月13日~12月20日

入場者数:51,569人

・「国指定史跡 牛頸須恵器窯跡とその世界」

期間:平成22年(2010)1月1日~1月31日

入場者数:51,569人

•「斉明天皇と飛鳥」 #### - 天子200 年 (2011) 7 F F 20

期間:平成23年(2011)7月20日~8月28日

入場者数:57,465人

• 「山の神々」

期間:平成25年(2013)10月22日~12月1日

入場者数:70,263人

・「新羅王子がみた大宰府」

期間:平成27年(2015)9月22日~11月29日

入場者数:127,485人 • 「太宰府天満宮の地宝」

期間:平成28年(2016)1月1日~2月28日

期間:平成30年(2018)9月12日~12月23日

入場者数:55,741人・「大宰府研究の歩み」

1八千川州九ツグツ

入場者数:89,860人



「大宰府研究の歩み」展示風景

「(1) 研究員の調査研究」は、各員の専門性を活かして進めている。その成果は多岐にわたるが、とくに注目できる成果には、広範囲におよぶ古代山城跡の微細地形データ蓄積があり、今後の研究基盤を整えた。加えて、大野城跡太宰府口城門出土木柱の調査研究が挙げられ、築城時期の具体的論拠となる資料も新たに見出した。その詳細は第2部第1章、第3部第1・2章で紹介する。また、大宰府の軍備に関する考古学的研究では、生産・流通・消費という鉄器のライヒヒストリーを検討し、大宰府保有兵器の備蓄過程といった実態に迫った。その成果の一部は、第3部第6章、第4部7章で紹介する。

「(2) 講演会・シンポジウム・イベント」と「(3) 展示公開」では、各時節で市民の関心が高いテーマを中心に展開した 9)。とくに重点をおいてきたのは、太宰府周辺の市町(宇美町・那珂川市・春日市・大野城市・太宰府市・筑紫野市)との連携である。地域の文化財における「国史跡指定」や「特別史跡

追加指定」の新規指定に際しては、関係機関と共に 特集展示やシンポジウム等を企画して、国内外への 周知に努めてきた。また、鞠智城を基点に古代山城 研究を推進する熊本県との連携も進めてきた。平成 30年(2018)には大宰府史跡発掘50年を迎え、一 年を通じて関係市町とともに連携事業を実施した。 九州国立博物館では、特集展示「大宰府研究の歩み」 とともに、講演会「響銅でつながる大宰府と東アジ ア」、シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の 官衙」、記念ウォークイベント「大宰府史跡ものが たり」を併せて実施した。

市民の関心が高いテーマを取り上げる一方で、九州国立博物館では新しいテーマの提案も行ってきた。トピック展示「新羅王子がみた大宰府」は、一般的に知られている遣唐使ではなく、あえて新羅使・遣新羅使に焦点を当てた。当館のコンセプト「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」に沿い、多角的視点から大宰府を紹介することが目的であ



市民ボランティアとともに制作した展示解説

る。本トピック展示には、127,485人もの来場者が訪れ、大変盛況を博した。

特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶余―」では、市民ボランティアとともに展示解説をつくりあげた。本展では、古代日本と百済の交流を象徴する人物として、百済王「武寧王」に焦点を当てた。武寧王は、日本への渡航中の「各羅嶋」にて誕生したことが『日本書紀』に記載されていることから、ボランティアを中心にその有力候補地である佐賀県唐津市加唐島を訪れ、現地調査を実施した。その調査成果を基に、展示解説の充実を図った。

註

- 1) 本シンポジウムは、九州歴史資料館・(財) 太宰府顕彰会・(財) 古都太宰府保存協会との合同で開催した。
- 2) 本シンポジウムは、太宰府市教育委員会と合同で開催した。
- 3) 本シンポジウムは、宇美町と合同で開催した。また、本シンポジウムは平成25~27年度科学研究費助成事業「大宰府の軍備 に関する考古学的研究」(若手研究 (B)、課題番号25770290、研究代表者:小嶋 篤)の成果を含む。
- 4) 本シンポジウムは熊本県「古代山城に関する研究会」との合同で開催した。
- 5) 本シンポジウムは、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議との合同で開催した。
- 6) 本イベントは、大宰府史跡発掘50年記念ウォーク・イベントの一環で、古都大宰府保存協会を中心に関係機関が連携して実施した。九州国立博物館では特集展示「大宰府研究の歩み」のミュージアムトークも併せて開催した。
- 7) 本シンポジウムは、平成30年度科学研究費助成事業「極薄青銅器と響銅を対象とした製作技術の比較―東アジア金属工芸史の 再構築―」(基盤研究 (B)、課題番号16H03379、研究代表者:川村佳男)の成果の一部である。
- 8) 本シンポジウムは、平成29 ~ 31年度科学研究費助成事業「古代大宰府の部内諸司に関する基礎的研究」(基盤研究 (C)、課題番号17K03088、研究代表者:松川博一)の成果の一部である。
- 9)特集展示・トピック展示の入場者数は、4階文化交流展の入場者数で集計している。

第3章

本書の構成

小嶋 篤

本書は、九州国立博物館が過去に実施した講演会・シンポジウム資料、展覧会図録に掲載した論考を 再構成した内容を中心とし、一部に新稿を含む。これらのうち、講演会・シンポジウム資料は当日配布 数が限られることから、本書の刊行を通じて、より利便性の高い研究成果の公開を図りたい。

以下に、各章の初出原稿を列挙する。

〈序論 大宰府学研究の目的と経過〉

第1章 研究の目的(新稿)/第2章 研究の経過(新稿)/第3章 本書の構成(新稿)

〈第1部 大宰府の器と編年〉

- 第1章 西海道の土器編年研究(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を一部改変)
- /第2章 西海道北部の土器生産(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載)
- /第3章 西海道南部の土器生産(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を一部改変) ※シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」は、平成29年(2017)2月18・19日に九州国立博物館ミューアジムホールで、
- **ジンボシワム | 徹底追究! 大学府と古代山城の誕生」は、平成29年(2017) 2月18・19日に九州国立 九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同開催した。

〈第2部 大宰府と古代山城の年代論〉

第1章 大宰府と古代山城の誕生(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載)/第2章 大宰府造営の年代論(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載)/第3章 日韓古代山城の年代論(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料に一部加筆)/第4章 有明海沿岸における古代山城の年代論(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載)/第5章 瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代(シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」当日配布資料を再掲載)

※シンポジウム「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」は、平成29年(2017)2月18・19日に九州国立博物館ミューアジムホールで、 九州国立博物館・福岡県・熊本県教育委員会が合同開催した。

〈第3部 筑紫の大城〉

第1章 古代山城とGIS(新稿)/第2章 大野城の研究成果(シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!」当日配布資料を再掲載)/第3章 糟屋屯倉と怡土城からみた大野城(シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!」当日配布資料を一部改変)/第4章 文献史料からみた大野城(シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!」当日配布資料を一部改変)/第5章 大野城の土木技術(シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!」当日配布資料を再掲載)/第6章 大野城と古代日本の戦争(シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!」当日配布資料を一部改変)/第7章 大野城と宇美の歴史的繋がり(シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!」当日配布資料を一部改変)/第8章 大野城築城と新羅(講演会「新羅王子がみた大宰府」当日配布資料を一部改変)

- ※シンポジウム「大城(大野城)の謎に迫る!」は、平成28年(2016)2月27日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・宇美町が合同開催した。
- ※講演会「新羅王子がみた大宰府」は、平成27年(2015)11月3日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・ 太宰府市教育委員会が合同開催した。

〈第4部 大宰府の官衙と諸司〉

第 1 章 大宰府の機能と律令国家(シンポジウム「展望・大宰府研究 蔵司跡の調査から」当日配布資料を再掲

載)/第2章 大宰府の官衙(シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載)/第3章 大宰府の諸司(シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の官衙」当日配布資料に一部加筆)/第4章 大宰府史跡出土の付札木簡(シンポジウム「展望・大宰府研究 蔵司跡の調査から」当日配布資料に一部加筆)/第5章 前面官衙跡の調査研究成果(シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載)/第6章 蔵司地区官衙跡の調査研究成果(シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載)/第7章 鉄から見た大宰府官衙(シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の官衙」当日配布資料を再掲載)

- ※シンポジウム「展望・大宰府研究 蔵司跡の調査から」は、平成22年(2010)10月30日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・九州歴史資料館が合同開催した。
- ※シンポジウム「展望・大宰府研究 大宰府の官衙」は、平成30年(2018) 12月15日に九州国立博物館ミュージアムホールで、 九州国立博物館・福岡県・九州歴史資料館が合同開催した。

〈第5部 大宰府の客館と響銅〉

第1章 新羅王子がきた時代 (講演会「新羅王子がみた大宰府」当日配布資料に一部加筆) / 第2章 「西の都」大宰府と外交施設(トピック展示「新羅王子がみた大宰府」解説図録より転載) / 第3章 輸入陶磁器と喫茶文化(トピック展示「新羅王子がみた大宰府」解説図録より転載) / 第4章 大宰府出土の響銅(シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」当日配布資料を再掲載) / 第5章 響銅でつながる大宰府と東アジア(シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」当日配布資料を再掲載) / 第6章 現代の鋳金作家からみた極薄青銅器(シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」当日配布資料を再掲載)

- ※講演会「新羅王子がみた大宰府」は、平成27年(2015)11月3日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・福岡県・ 太宰府市教育委員会が合同開催した。
- ※トピック展示「新羅王子がみた大宰府」は、平成27年(2015) 9月22日~11月29日に九州国立博物館文化交流展示室で、九州国 立博物館・福岡県・太宰府市教育委員会が合同開催した。
- ※シンポジウム「響銅でつながる大宰府と東アジア」は、平成30年(2018)11月23日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館が開催した。

〈第6部 山岳信仰と宝満山〉

第1章 山岳信仰の考古学(トピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録より転載)/第2章 考古学からみた宝満山信仰の始まり(トピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録より転載)/第3章 宝満山の歴史と信仰(トピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録より転載)/第4章 宝満山と古代大宰府(トピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録より転載)/第5章 宝満山の最新発掘調査成果(トピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録より転載)/第6章 宝満二十五坊の姿(トピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録より転載)

※トピック展示「祈りの山 宝満山」は、平成21年(2009)11月13日~12月20日に九州国立博物館文化交流展示室で、九州国立博物館・ 財団法人太宰府顕彰会が合同開催した。

〈第7部 大宰府管内の信仰〉

第1章 宗像・沖ノ島と胸肩君(新稿)/第2章 宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果(講演会「神宿る島と祈りの記憶」当日配布資料を再掲載)/第3章 宗像・沖ノ島祭祀の実像(シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料を再掲載)/第4章 巨岩と社殿(シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料に一部加筆)/第5章 沖ノ島祭祀と遣唐使の航海(シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料を再掲載)/第6章 御長手神事と沖ノ島(シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」当日配布資料を再掲載)/第7章 マツリの記録(新稿)

- ※講演会「神宿る島と祈りの記憶」は、平成29年(2017) 1月21日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・「宗像・沖ノ島と関連遺産群|世界遺産推進会議が合同開催した。
- ※シンポジウム「知られざる沖ノ島祭祀」は、平成30年(2018) 1月20日に九州国立博物館ミュージアムホールで、九州国立博物館・ 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議が合同開催した。

〈終論 大宰府学研究の成果と展望〉

第1章 研究の成果 (新稿) /第2章 研究の展望 (新稿)